

第 19 回 京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時 平成 30 年 9 月 10 日（月） 午後 1 時 30 分～3 時 30 分

場所 京都ホテルオークラ アポロンの間

出席委員（敬称略）：

池坊専好会長，潮江宏三副会長，奥野史子委員，河島伸子委員，笹岡隆甫委員，清水重敦委員，杉本歌子委員，建畠哲委員，田中誠二委員，田波宏視委員，筑摩寿委員，丁春燁委員，三田真史委員，やなぎみわ委員，山本毅委員，鷺田清一委員，村上圭子委員

事務局：

平竹耕三文化芸術政策監，北村信幸文化担当局長，尾崎学文化芸術都市推進室長，川口伸太郎美術館再整備担当部長，西山真司文化財担当部長，東憲明担当部長ほか

1 開会

2 議事

(1) 会長，副会長の選任について

池坊専好委員が会長に選任され，副会長に潮江宏三委員が会長から指名された。

(2) 平成 29 年度の「第 2 期 京都文化芸術都市創生計画」及び「京都文化芸術プログラム 2020⁺」の取組状況について

別紙のとおり意見交換

(3) 平成 30 年度 本市の主要な文化芸術事業等について

別紙のとおり意見交換

3 閉会

(別紙) 意見交換摘録

(2) 平成 29 年度の「第 2 期 京都文化芸術都市創生計画」及び「京都文化芸術プログラム 2020+」の取組状況について

<委員>

京都市の基本計画，京都文化芸術都市創生計画，京都文化芸術プログラム 2020+など，行政の計画はどのような層があるのかを教えて欲しい。京都市の芸術文化都市の創生に関わる計画の柱，つながりを一般的に知りたい。

<事務局>

京都文化芸術都市創生計画の位置付けだが，京都市全体の中で見ると，京都市の一番大きな都市理念として世界文化自由都市宣言を掲げており，その下に京都市基本構想という市政の基本方針がある。さらにその下に部門別計画として京都市基本計画があり，そのうち，文化の分野別計画として第 2 期 京都文化芸術都市創生計画がある。また，京都文化芸術都市創生計画の中で，とりわけ 2020 東京オリンピック・パラリンピックと文化庁の全面的移転の決定を受けて，特に強力に推進すべき事業をまとめたものが京都文化芸術プログラム 2020+になる。このプログラム 2020 は，創生計画の中に包括継承はされているが，とりわけ 2020 年に向けて，事業を取り出したものになる。

<委員>

さらに伺いたい，京都市基本計画の第 2 期は平成 32 年度までで，平成 31 年度中に第 3 期を策定されると理解しているが，京都文化芸術都市創生計画は平成 38 年度までで策定されており，時期的にずれがある。他の分野もそういうことは大いにあるものと思うが，例えば，京都市の基本計画の第 3 期で，さらに野心的な文化プランを作成するのか。お互いどのように影響しあうのか。

<事務局>

京都市基本計画は平成 32 年度までであるため，次の計画の検討を進めていくことになるが，文化の計画とも連携し，情報共有をしながら第 3 期の計画の検討をしていく。第 2 期創生計画は平成 38 年度までの計画になるが，中間となる 5 年が経過した際に，もし，第 3 期の基本計画で，今よりも幅広い分野を対象とするということになれば，創生計画も 5 年の節目でさらに幅を広げていくのかについて，検討し，審議会の委員の皆様からも御意見を頂戴しながら，創生計画の後半の 5 年について検討をして参りたい。

(3) 平成30年度 本市の主要な文化芸術事業等について

<委員>

京都市教育委員を代表して来ており、また、私はシンクロナイズドスイミングを長くしていたので専門はスポーツである。東京2020オリンピック・パラリンピックやそれに続くワールドマスターズゲームズが関西で開催され、さらにその前の2019年にはラグビーのワールドカップも開催されるように、今後、国際的なイベントが続く。オリンピックというものは、単なるイベントではない。オリンピズムにはスポーツ、文化、環境の3本柱があって、大きな1つに文化が掲げられている。日本の文化に関する発信地としては一番は京都だと思っている。今やっておられる事業をさらに強化して邁進して行っていただきたいという思いがある。スポーツと文化と一緒に実施することは難しい部分があるが、例えば、文化遺産の前でアスリートが走り抜けるというのがあると、視覚的にスポーツと文化を融合して発信できるのではないかな。また、教育委員なので教育分野から言わせてもらうと、オリンピックの中でもホストタウンとの文化交流というものがある。ホストタウンでスポーツとの交流だけでなく、文化交流に関してもつないでいくことは1つのアイデアではないかと思う。さらに、私は京都に長年暮らしており、子どもが3人いる。暮らしの文化である地蔵盆を外から来てもらった人にどう見てもらうか、体験してもらうか、暮らしの文化を外にどうアピールしていくのかということも考えていくとよいと思っている。先日、町内で地蔵盆を行った際に、海外の観光客がよく覗いてこられ、数珠回しをしているときにこれは何をしているのか、などと質問された。海外の観光客は体験することも求めているので、そういう文化の発信の方法、また、市民の暮らしの文化を体験してもらう機会も何か作ることができればよい。また、先日、子どもが通っている御所南小学校が雅フェスティバルを開催されたが、京都の華道、茶道など、子どもたちが実践して体験するよい機会であった。一部の頑張っている先生方が一生懸命やることで実現できているように思うので、そういった活動をさらに多くの学校でできるよう、教育委員会とも連携しながら充実できればよいと感じた。

<委員>

多岐に渡る課題がある。例えば、文化を基軸とした市政運営の方針や、資料3で記載されているリーディング事業は、文化庁との連携も視野に入れていると思う。大きな方針も掲げておられ、それ自体は大事だが、市独自のリーディング事業として記載されている事業にイベントやフェスティバル、国際交流というお祭りの要素が非常に強いように思う。大きなイベントなどは、京都市に様々な資源があると対外的に発信できる機会であると思うが、他方で、本当の意味で文化を通じた市民生活のクオリティを上げていく、あるいは次世代を育成し、福祉事業と連携するなど、派手さはないが、長い期間で見たらそれが一番京都の生活と文化のクオリティを確かなものにしていく、成熟させていく取組が不可欠だと思う。HAPSなど、若い芸術家が京都のまちで仕事を見付け、活動する場所を提供するなど、地域のニーズとアーティストを仕事としてつなぐ活動は全国からも注目されている。先を見た、地味ではあるが本当の意味で人を育て、生活のクオリティを上げて、共生社会を目指す取組をさ

らに大きく取り上げてほしい。

<会長>

どうしても文章になるとイベントなど目に留まりやすいものに注目しがちだが、先を見通した人づくり、人を育む取組、あるいは市民生活のクオリティをいかに上げていくかという地道な取組の重要性を忘れてはならないと思った。

<事務局>

資料4の重点方針で、方針2「地域共生社会の実現」をあげている。子供たちが暮らしの文化も含めて、幅広い文化芸術に触れる機会を作るため、地道ではあるが各小学校にプロの芸術家を派遣し、ほんものの文化芸術に触れる取組もしている。また、社会包摂事業に取り組むことで、障害のある方と文化芸術との関係など文化都市としての懐の深さが求められることかと思うので、イベント、フェスティバルに目を奪われず、御指摘踏まえて、今も続けている地道な取組をさらに続けていきたいと思っている。

<委員>

先月の台風で大風が吹き、外を車で走っていると多くの木が倒れていた。健康そうな木であったが、倒れていたのがなぜかと考えたとき、木がいくら元気であっても土壌が弱かったのではないかと気が付いた。まさに文化はそういうところが大事だと考えている。京都に住んで活動している芸術家の水準は決して低くない。トップクラスの人、団体が多く存在する。私が知っている限りでも京都市交響楽団の水準は非常に高く、日本のオーケストラの中でも、京響に勤めたいという、演奏家の憧れの場所になっている。それを支える土壌の部分として、市民生活の部分に注目したい。京響の客層を見ていて、コンサートを聴きに來られる方の年齢層は高く、教養もある、時間もある、お金もある年代か、お金はないが時間はある学生だ。そこに働いている年代が抜けている。若い人でも働くようになると、お金がない、時間がないとして、コンサートを聴きにいなくなる。ある程度力のある行政や財界からの支援を仰ぎながら解決していかないと、市民が生活の中で文化芸術を楽しむところまではなかなかいかないのではないかと。実際に、様々な取組をされている方々や、京都市の職員も頑張っているのはよくわかっているがそのために残業をして、時間がない、暇がない、その割に収入が低い。そういうところで、生活の中で文化を楽しむという雰囲気醸成していかないと、市民が日常の中で文化芸術に親しむことは難しいのではないかと。そういったことを最近よく感じる。また、資料2の中の重要事業1に掲げる2つはとても大事な取組だ。これだけ素晴らしい取組をしているが、どれだけの子どもたちがこの事業により、文化を体験できているのだろうか。「ようこそアーティスト」は40箇所、もう1つの「学校教育をはじめ、あらゆる機会を通じた伝統的な文化芸術に触れる取組」は8校で700人を招待している。実際に体験した子どもたちはとても貴重な体験をしたかと思うが、1年に700人であれば、京都市の中学生全体が経験するのに何年かかるのか。さらに、芸術家が訪問し、その恩恵を受けるのに何年かかるのか。もっと、文化芸術に触れる頻度を増やして欲しい。

私は音楽家なので、京響を引合いに出すが、京響の演奏を年に1回は子どもたちに聞いてもらえるようにしてほしい。そういうためには、相当大胆なことをしなければならないと思う。子どもの頃に本物の芸術に触れるのはとても大事なことだ。これをさらに太い流れにして欲しい。さらに、芸術分野で鑑賞する人を増やすためには、実際に体験して興味を持ってもらうことが大事だ。単に聞くだけでなく、実際に踊ってみる、花をいける、など実際にやってみることが必要だ。とてもよい取組だからこそ、さらに力強く頑張してほしい。

<会長>

働き手になると文化から乖離していくということは、伝統文化でも同じ状況かと思う。働き方改革、ワークライフバランスというのが社会的にも大きなテーマになっているので、いかに心豊かな生活を創造していくか、働きながらいかに生産性をあげて文化を享受できる生活にしていくか、活発な議論が求められるテーマかと思う。また、アーティストが子どもたちのところへやってくる。一過性のものではなく、それをいかに定着させていくのか、将来の支援者、理解者になってもらえるように、それをどのようにして太い流れに作っていくのか、本当に必要な視点かと思う。

<委員>

十数年前に、哲学者の梅原猛先生と京都市内の様々な芸能、歴史などを知るために歩いたことがある。そこで気付いたことは、京都の中でも地域に根付く知らない場所、知らないものが数多くあると感じた。例えば、左京区の大原や八瀬など様々な地域があって、そこで根付く芸能にはすばらしいものがある。これまでの委員の方々が意見を出されたように、暮らしの文化について非常に興味深い。イベントではなく、京都に住む方々、いわゆる住民がその地域で大事にしているものが、とても大事なことなのだと思う。資料で「京都おもてなし百科（仮称）」で人々に知られていないもの、気付かなかったもの、「この地域にこのようなものが」というものがこれからリストアップされていくのかが気になる。メディアも知らないような文化で、地域にいる2～3軒で守っているもの、習慣、暮らしの文化があると気付かされたことがある。全てを公にすることが必ずしもよいとは限らないが、そういった暮らしの文化も豊かに守って欲しい。目に見えていないものをどのように守るか、育むのかはきっと忘れてはならないことかと思う。また、若い人たちをそれぞれの芸術分野トータルでどう育てていくのかを考えることが、京都は肝だと思う。若い人が大成するに当たって、大阪でもなく東京でもなく、他の都市でもなく京都として、どのような形でバックアップするのかという姿勢を熱くはっきりと見せる必要がある。そうしなければ、若い人は東京や大阪に行く。それは今後、大学の在り方にも直結すると思うが、若い人を育てること自体が京都市民の協力、理解なしでは語れないものかと思う。行政とともに一般の方々からも応援してもらえる環境づくりにぜひ取り組んで欲しい。

<委員>

今回の審議会では、暮らしの文化や市民の暮らしに対する御意見が多いように思う。市民の暮らしというところで、当方の保存会が守っている建物は重要文化財に指定されて残っている。私たちは今、京文化とともに建物を守っている。有形に対して、無形の部分がなくならないようにしっかり守っていく活動をしている。暮らしという点で、重要に考えていることを伝えたい。重要文化財に指定されている建物は、重要文化財になった時点で現状維持をする必要がある。変えることができずに凍結保存になる。本来、建物自体は暮らしと密接に関係しているので、暮らしや世の中の変化とともに変化して然るべきものだが、それが重要文化財になったことで変えられなくなった。もともとは商家の米蔵で、商家に米蔵があるということが珍しいとのことで、重要文化財に指定された建物があるが、指定された当時、カーペットや防音パネルを付けてピアノ教室として使っていた。このカーペットや防音パネルも含めて重要文化財になったので、修復する際にはその部分も含めて修復しなければならなくなった。例えば防音パネルを外すのであれば、現状維持の変更届が必要になり、文化庁との協議のもと進めていくという、少し不思議な体験をした。そういったことも含めて、当方の保存会は、生活も建物も、変わらないということの安心を皆様にお伝えするのが役割なのだと思う。世の中の人たちは変わらずにはいられないし、変わる必要がある。伝統文化でも、変わらなければ受け継いではいられないという、非常に難しい立場にある。守ってきたものをどのように変えていくのかという模索があると思う。当方が守っている建物、京文化が変わらずにあるから、私たちは安心して変わっていけるとしてもらえるように、重要文化財とともに京都の暮らしの文化を地道に守り伝えていこうと思っている。

<委員>

他の委員とともに、現在の第2期の創生計画を作るための政策部会に入って議論をした。私の思いとしては、例えばファインアートなどのハイカルチャーな文化芸術やイベントだけでなく、最も大事な土台となる暮らしの部分と、ハイカルチャーは京都は必ずつながっている、そのつながりを構造として見せていく必要がある、また、土台の部分を見せていく必要があるということを多くの時間を費やして議論して、この創生計画が作られた。皆様がおっしゃられたお話は、この計画案を作るときに考えたことと共通しており、改めてこの方針が間違っていなかったことが確認できた。私は建築、町並み、景観を専門としているが、この観点からすると京都は多くの文化財が残っており、古いものをしっかり守ってきて、その中で文化が営まれている場所だ。最近、特に思うのは、変わっていく部分というものにも非常に価値があると思っている。そこには他の都市にはない魅力もある。近年、古い建物を保存するだけでなく機能改善して住みやすくするリノベーション、あるいは全く違う機能のものにするコンバージョンが全国的に流行り始めており、価値を持ち始めている。改めて見ると、京都はその先進地だ。古いものを守りながらも活かし、新しくして、時代をつないでいく。明らかに全国をリードしているので、むしろこれは価値として発信すべきだというように考えられつつある。どうしても暮らしの文化などはお金にならない地味なものであるが、京都におけるリノベーションとして全国をリードしていて、全国に発信できるような

ものだと思う。これは経済的価値も生み出しているものだ。暮らしの部分が経済的価値も生んでいるし、全国に対して発信できるものにつながるのだということが、今後、全体的に出てくればよいと思っている。

<委員>

様々な流れがある中で、そのうちの多くの草の根的な部分を市が支えているかと思う。例えばHAPS、芸術センター、京都芸大のギャラリー@KCUA、学生アートオークションなどだ。これらのように大胆で、他の地方公共団体が手を出さないような実験や試みも支えている。そこに多くは口を出さずに、携わる若い人たちに自由にやらせている点は頼もしいことだ。これらを安定して維持していく基盤は拡大して行ってほしい。純然たる民間の話ではあるが、最近、東京からロックの空間現代というバンドが拠点を京都に移したように、アーティストは増えているのではないかと思う。あまり京都からアーティストが出て行かなくなり、京都に拠点を置いたままのアーティストが増えた。今、最も注目しているのは、やなぎみわ委員も中心になっておられるが、クラウドファンディングで、まもなくスタートしようとしている小劇場が京都の南の方にある。こうしたことは規模は小さいが非常に重要なことだと思う。また、二条城が資料の説明でよく出てくるが、昨年度、二条城を東アジア文化都市現代美術展で会場として使用した。国宝の重要文化財であるが、柔軟に対応してもらい、重要文化財でない外の部分も借景として活用し、うまく利用できたことで成功につながったと思う。二条城を保存すると同時に活用するということで、大きなイベントを実施していけばよいのではないかと思う。パリのヴェルサイユで国内外の著名作家が展示しており、それと比べると規模としては小さいが、市の持つ観光スポットでもある文化財としては代表的なものになるのでうまく活かしてもらいたい。HAPSや芸術センターなどについては、市は側面からサポートしてもらい、若い人たちに託して続けて行って欲しい。また、二条城などは市がリーダーシップをとって、大胆に活用していくことに期待する。

<委員>

専門が文化経済学、文化政策論でもあるので資料4の方針1を興味深く拝見していた。方針1に掲げられている内容、事業ともによいと思うが、今、市でされている文化事業は全て京都の経済価値を高めているものだと思う。京都にアーティストが残ったり、アーティストが増えているという委員の発言は実際にそうだった。純粋なアーティストだけでなく、クリエイティブ産業関係者のようなIT産業のデザイナーも増えているように思う。京都の街中に、海外からの観光客ではなさそうな欧米の30~40代の人の子連れで歩いているのをよく見かけるようになった。また、LINEのオフィスが京都にできたり、京都なら働きたいという世界からのデザイナーやクリエイティブな仕事をする人が増えた。アップルストアも東京、大阪、名古屋以外で、150万人規模の都市にあるのは京都だけだ。京都のクリエイティブな文化力が産業と結び付き始めていて、クリエイティブ経済や創造産業など学术界で話していたことが京都で実感できるようになった。この結び付きに関して、本格的な調査はしていないが、市でもそういった感触が掴めるようであれば、ぜひ1度調べて

もらえたらと思う。この調査があれば、文化を基軸とした市政運営が経済に結び付くのだという証拠になる。資料4の方針1に観光と結び付いて、と記載されているが、観光と結び付かなくてもよい。文化に力を入れて、生活文化を大切にしたり、二条城を活用したりと、文化行政がやっていること全てが経済力に結び付いている仮説を示すことができればと思う。また、担当所管上、異なるかもしれないが、例えば、音楽分野においては、堀川音楽高校、京都市立芸大があって、世界でもトップレベルの交響楽団があって、コンサートホールがあって、一貫した政策がある。ここまでお金を掛けている都市は少ない。特にそのことに注目されていないかとは思いますが、もっと自慢してもよいのではないかと感じた。これは美術の分野など他の分野でも共通して言えることだ。

<副会長>

若い人たちの育成、暮らしの文化の話が出てきて、委員の皆様が検討していただいた創生計画の柱に大きく関係していることであるが、小さなことの掘り起こしもまだまだしていないといけないと思った。京都でも中心に偏っているので、もう少し広い視野での掘り起こしが必要だと感じた。また、今後美術館は改修するが、これまでのような美術館の在り方と異なるものにしてと模索している。展覧会自体も企業と積極的に連携して実施しようと考えており、今日もある企業と映像の展覧会をしようと話をしていただばかりだ。もちろんそこが機械を持ち込んで、その機械をアーティストが使用するようなイメージ。企業もそれにより市場開拓につなげていきたいという思いだ。そのようにして、少しずつ経済価値は高められると思う。経済との関係は、企業のマインドがアートを購入するマインドになっていない。残念ながら、京都の画商と仲介する方々が積極的でないこともある。それをどのように改善するのかということも考えていく必要があると、以前、市の職員にも話をしていた。それも様々な方法があると思う。企業セミナーでアートを活かした企業作りを推進するなど、シンポジウムをするのも大事ではないか。欧米の企業では、社長室にコンテンポラリーアートが飾ってあるのは当たり前なこと。そういうマインドが京都に少しでも定着すれば、京都にいる作家がわざわざ東京に行かなくても京都で売れるようになればよいと思っている。そういう方向も少し掘り起こして、きめ細かな計画を立てていき、全体を見るとよいと思う。基本的には、計画に掲げる4本柱には大賛成だ。京都ならではの人材育成と暮らしに根付いた文化を大事にする姿勢をしっかりと持っておく、ただ、まだ課題は残っているということの皆様からも御指摘いただいたのかと思う。

<会長>

先ほど、文化力と産業の結び付きということだったが、市として文化を基軸とした経済的価値が分かるようなデータは持っているのか。

<事務局>

御提言いただいた調査は具体的にはまだ京都市ではされていない状況なので、いただいた御意見を踏まえ、今後、研究して参りたい。

<委員>

市では幅広い事業を展開していると思った。関わっておられる皆さんの努力に敬意を表したい。一方で、行政の審議会に出席するのが初めてであるため、御無礼な感想も含めて申し上げます。1つ1つの項目が否定しようもない大切な事業であるが、反面、それが積み上がっていったときに、京都が目標としている文化芸術都市がどのような形なのか、それがどういう尺度で測られるのか見えないところが、初めて参加した者として当惑したところがある。1つ1つを見ると、それぞれに意味があり、やらないよりはやった方がよいかと思うが、例えば目標として、何年後に京都は、「世界で、全国で、最も文化芸術に触れられる都市にする」や「若い芸術家がいきいきと活動できる都市になる」、また、「守り続けてきた文化財や伝統文化を手厚く支援するまちになる」という目標があったとして、それを毎年、何かの尺度で測って、目標に近付いているという進捗が分かるような工夫が必要だ。1つ1つが積み上がったときにしっかり京都というまちに残っていくものが見極められないと、非常にもったいない。資料4の方針1, 2, 3や、そこに記載されている事業の重要性は分かるが、全体としてこの部分は目標に近付いているから、来年はこの部分に力を入れてさらに目標に近付けていくということが分かるようにしてもらおうと、審議する側としても進捗が分かりやすい。この辺りが足りていないと感じた。

<委員>

創生計画の推進は、先ほどお伺いした都市理念に世界文化自由都市宣言を持ち、京都の都市格を文化芸術の観点から磨き高めていこうというものだが、特に切り口として、文化・観光・経済を融合させ、文化芸術化した都市構想につなげていく。この京都が行う創生計画は、人口減少、地域力の低下が懸念される日本の地方都市の中でモデルとなるような計画の推進や、ビジョンの実現を果たしていくことも京都の大きな役割ではないか。先ほどから議論に上がっているように、包括的な文化芸術の振興、まちづくりにつなげ、文化芸術を経済や観光活動にもつなげていく、まさに文化の保全と活用を両輪で推進していく素晴らしい京都らしい計画をまとめられたと思っている。これを持続可能に成果を測ろうとしていくと、中長期的に見れるよう評価マネジメントする体制作りが一步踏み込んで必要ではないか。京都市では全庁挙げて、あらゆる行政機能を文化芸術振興と結び付けて成果を出す、そのための推進本部を平竹政策監を中心にして作り上げられたとのことだ。かつ、計画を、現在もあるのかもしれないが、民間である産業界、学術研究の大学、アーティストも含めた様々なセクターの人たちを巻き込んで、オール京都で推進する体制が必要ではないかと思う。さらに、持続可能にするという視点から、先ほど議論にもあったが、何か指標となる成果を評価し、それをまちづくりのPDCAサイクルに載せていけるようなインジケーターである重要業績評価指標、いわゆるKPIであったり、これから調査を必要だという議論から、文化芸術を軸とした市民の生活実態調査により、いかに文化芸術が市民の生活に息付しているのかということを盛り込んで確認できるものをこれから作っていければよいと思う。例えば、アーティストインレジデンスで海外から多くのアーティストが来るのであれば、その満

足度調査など、海外の方々から見た京都が文化芸術都市としてどのように評価されるのかの実態調査を継続的に行う中で、創生計画の練り直しや進捗に根拠を持って推進できる仕組みがあればよい。

<事務局>

政策評価やそれに係る目標、点検が必要ではないかという御指摘について、今日、配布して説明した資料は事業の説明になっているが、評価の件については、京都市では事務事業評価や政策評価という仕組みがあり、個別の事業ごとに事業費と成果の関係、また政策レベルでの評価もしている。十分ではないが、市民への満足度調査、生活実態調査を行っている。今回の会議では、そういった観点でもお示しできるようにしていきたい。委員からの御指摘を十分、心して参りたいと思う。

<委員>

私は美術と演劇、特に野外劇を行っている。昨年では東アジア文化都市の事業で東九条マダンの韓国や朝鮮の伝統芸能の皆さんとともに野外劇を行った。それ以外にも、美術の方で写真撮影をする際に、許可をとって行うことがある。それらの経験から、暮らしの文化、地元の中に入って作品を作るとき、伝統的なことを守っておられることを踏まえる必要がある。東九条マダンは、25年間その地域で守ってきた。ずっと守ってきた方々のところに、作家が入って、その地域の方々とお互いに理解し、信頼を得ながら作品を作ることは、大変時間も掛かることだ。地元に行って、すぐに意気投合できるようなものではない。そういったときに、行政の事業の一つとして後押しがあると入りやすいのは事実だ。最近、現代美術の分野でそういった後押しである行政を拒否する動きも見られる。作品の内容にもよるかと思うが、行政の支援を受けると自由にやりにくいという作家もいる。私の場合は、野外劇は多くの人に関わらないとできない。公演時に様々な許可も必要だが、スピーカーの方向一つとっても、町内会長を集め、町内に周知する、などしなければならない。それでもクレームがあることはある。野外劇で個人でされている場合もあるが、その方は同じ地域で長年、野外劇をされているような方だ。私の場合は新しい所に1つ劇場を作るようなものなので、特に若い作家にとって地域に入っていくということは敷居が高く難しい。その部分をうまくつないでくれるとよいと思う。また、来年、巡回個展を実施する。高松から福島、群馬、広島県立美術館もあるが、各美術館のある地域の工業高校の機械工学の学生とコラボして機械を作っているが、そこでは各工業高校の顧問の先生の裁量が大きいかと感じる。学校の判断というよりも、先生個人の判断に任されている部分が多い。小中学生へ文化に関わってもらおうとする場合も、学校によっても差があるのではないかと感じる。

<委員>

ようこそアーティストも含め、京都の子どもたちに文化、芸術にしっかりと親しむ機会を得ることが必要と思っており、度々その話をしている。先ほど、委員がおっしゃっておられた京響の演奏を子どもたち全員が味わうということは本当に素晴らしいことだと思う。同じように、数多くある伝統文化を、全員が味わえるような土台作りを支援していただいたいと思う。ただ、予算もあることから、教育委員会だけでできるものでもなく、京都市だけでなく、文化庁や府ともしっかりと連携しながら、予算立てを考え、もしくはお金を掛けずにできる方法を考える必要がある。子どもたち全員が文化芸術に親しむ時間を得ることは大事だ。お金を掛けないでできることと考えると、いけばなの場合はよく展覧会をしているので、そういったことを見に行くだけでも体験になる。そういった時間を持ってもらえたら嬉しく思う。京都の子どもたちがしっかりと文化に触れているのだと、日本の代表として文化の代表としてしっかりと発信していくことが大事だと、皆様の御発言を聞いていて心強く思った。地道なことも大事だと思う。文化庁と連携する **Kyoto steam** を実施すると伺っており、この中でメディアアート、VR、ARなど、最新技術を活用した取組はオリパラでもキーになってくることかと思う。文化の見せ方としてVR技術の活用は重要であり、能楽をARで行うということも非常に面白そうだと感じた。こういったところをしっかりと推進していくことは、これからの日本文化にとっても重要なことだと思うし、他の様々なジャンルと融合させて活用できるとよいと思った。

<委員>

2年後のオリンピック・パラリンピック開催に向けて、最近、家の周りに様々なホテルが建設されている。正直なところ、これだけの人が京都を訪れるのだろうかと素朴に疑問に思うほど小さなホテルが数多く建設されている。それを踏まえて、このような事業計画がされているかと思うので、今後、とても興味があり、どういった展開になっていくのか非常に楽しみである。私は子どもが3人おり、学校の行事の中で市が実施しているイベント等にも度々参加していたが、少し残念に思うことがたまにあり、広く発信をしていけばさらに人が集まったのと思うことがあった。発信の手法について、華美にはできないのかもしれないが、もったいないと思った。参加をすれば子どもは楽しかったと言っているので、子どもの成長に合わせた取組があれば嬉しく思う。

<委員>

様々な話を伺って、行政、民間で多くの動きがあるのだと感じた。やはり、若い世代、特に、子どもの頃からアートには触れて欲しいという思いがある。日本の子どもは放課後には塾に行ったり、授業の中でもカリキュラムに取り入れることが難しかったり、ハードルが高いと思った。若い世代はなかなか演劇を見に行く時間が作れない。私自身も福祉の仕事をしているが、働きながら、勉強もしながらとなると、そういった余裕もない、お金もないという状況だ。そういった状況の中、芸術に対するハードルも私としては高いと思っている。反面、今の職場が東九条にあり、昨年、やなぎみわ委員の野外公演ではカメラ撮影で参加した。

昨年一年は、芸術や文化に対する意識も高まって、イベントなどにも参加した年だった。ただ、その地域の人たちにとって、突然、アートが地域の中に入ってくると、アートって何か、と戸惑う。短いスパンで理解してもらうことは難しいことだ。それは自分自身でも体感した。受け入れる側でもあり、アーティストにも受け入れてもらう。そういったときに、地域の人にとってのメリット、アーティストにとってのメリットが両立する形は何になるのかを今後、考えていければよいのではないかと思う。

<会長>

最近、災害が多く起こっている中で、文化芸術は人と人をつなぎ、生きがいをもたらし、相手を思いやる役割があり、レジリエンスと深く結び付いていると思う。どのような年代であっても、どのような状況であっても暮らしの中や自分の中に文化芸術があるような生き方や社会の構築の一助としてなればと思う。本日は様々な御意見をいただいた。閉会時間となったので、これで議事を終了する。委員の皆様には、進行に御協力いただき御礼申し上げます。

<事務局>

熱心に御議論をいただき、御礼申し上げます。冒頭、資料の配布の手違いがあって申し訳なかった。傍聴に来ていただいた皆様も最後まで熱心に聞いていただき、御礼申し上げます。多くの意見をいただき、ここでまとめてお話しすることは難しいが、我々は基本的には、計画にもあるように成熟した都市文化を基盤に新しい文化を創造し続けるまちということを10年間の目標であると思っている。裾野を広げるといふことと、頂を高くしていくという両方が必要かと思う。全体を見るとそれぞれの関係が分かりにくくなっているかもしれないが、その思いで計画も作っていただき、それに基づき事業を進めている。先ほどの御意見に、京都はもっと自慢してもよいのではないかとあったが、京都はもともと明治維新のときに文化芸術に力を入れようとしたのは、西陣であったり、友禅の力をさらに活発にせよという発想で学校を作っていたということもあるので、基本的には産業と文化芸術はもともとシンクロしながら発展してきたところがあると考えている。それはこれからも全ての施策を融合して、進めていくべきものかと思う。メディアアート、VR、ARはこれからも重要だというお話があった。メディアアートの分野で言うと、私の実感にはなるが、圧倒的にテレビメディアは東京に集中している。その技術、制作会社が東京に集中しているのは仕方がないことかと思っている。ただ、このままではこれからの世界はそういうことを取り入れながらやっていかないといけないとひしひしと感ずるので、**kyoto steam** など新しい事業において、京都の持つ新しい文化芸術資源を市民の皆様の幸せへつなげると同時に、新しい芸術表現にもつなげていきたい。それだけではなく、子どもたちの鑑賞教室も、小澤塾で子どものためのオペラや京響で小学生、中学生の鑑賞教室を実施しているが、1年に1回というのは難しく、小学校の間に1回は鑑賞する機会がある、というくらいであり、できる限り文化芸術に小さい頃から触れることはとても大事だと思っている。やはり京都というのは、市民の皆様の生活の中に文化芸術がある。そういう思いもあって、ロームシアター京都は公

演をしていなくても、いつでもやって来てほしいという形で運営し、新しい美術館でも自由に入ってもらえるゾーンを作る予定で進めている。今後とも、本日いただいた御意見を参考にして、さらに京都の文化芸術の振興と発展のために尽力して参りたいと思っているので、引き続き、御指導ご鞭撻のほど、よろしく願いしたい。